

## 奉神礼基礎講座 9 掛け合いのワザ 1 連祷

### Slide 1

こんにちは。奉神礼基礎講座は誦経や聖歌、堂役など奉神礼に奉仕する方々のスキルアップのために4年前の夏に、西日本教区の行事として開講しました。奉神礼の構造や歴史背景を学び、奉神礼のワザを磨き、「正教の伝統ってすごい」ことをあらためて知り、自信を持って「来て、見てごらん」と、多くの人々をお誘いするためです。奉神礼を担う私たち自身が「正教の奉神礼って、すごいよ、楽しいよ」と本気で思えること、心から「喜んで」いることが何よりの伝道になります。

### Slide 2

昨年からオンラインに切り替え、ZoomとYouTubeビデオを利用して、実技編（緑のシリーズ）と理論や歴史を学ぶ「正教聖歌の伝統」（青のシリーズ）の二本立てで行っています。今回は緑のシリーズ、実習編、「掛け合いのワザの1」として、「連祷」をとりあげます。

### Slide 3

さて、昨今、巷ではゴスペルだとか、アカペラだとか、コール&レスポンスだとか、と、さも目新しいことのようにもてはやされていますが、これはキリスト教のはじまりから、もっといえば旧約の時代から行われてきたことで、正教会は2000年間行い続けています。その代表「連祷」をとりあげます。連祷をイキイキさせることはお祈り全体のイキイキにつながります。

### Slide 4

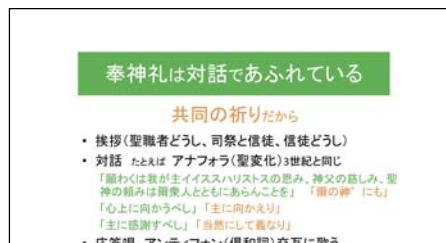
そもそも、「教会」と訳されているのは「集まり」を意味するギリシア語「エクレシア」です。また「奉神礼」を表す「リトウルギア」は「人々の仕事」という意味です。つまり教会という集まりの共同の仕事です。聖職者、堂役、誦経、聖歌など教衆と呼ばれる奉仕者、そして一般の信徒と役割分担はありますが、あくまでも教会全体の仕事です。

教会はしばしば「舟」にたとえられます。ハリストスが頭です。教会に集う人はすべて乗組員、サービスを楽しむだけの「お客様」「見物人」はありません。みんな働きます。

共同の仕事を行う時、大切なのが、息を合わせること、声を掛け合うことです。

### Slide 5

だから正教会の奉神礼は対話であふれています。まず「挨拶」。神父



さんは信徒に向かって何度もお辞儀します。また「衆人に平安」（みなさんに平安）と呼びかけ、信徒は「爾の神<sup>o</sup>にも」（あなたの心にも）と返します。至聖所で聖職者どうしが肩に接吻しあいます。

聖体礼儀の一番大切な部分、アナフォラ、聖変化の部分は3世紀からほとんど変わっていません。カトリックや聖公会とも共通です。これも会話で始まります。司祭が「願わくは我が主イイススハリストスの恩み、神父の慈しみ、聖神の頼みは爾衆人とともにあらんことを」と呼びかけ、信徒は「爾の神<sup>o</sup>にも」と返します。司祭が「心上に向かうべし」と呼べば「主に向かえり」と返します。「主に感謝すべし」と言えば「当然にして義なり」（それはただしいことだ）と答えます。

ほかにも、掛け合いの歌がたくさんあります。ポロキメンやアンティフォンなどです。アンティフォンは次回11月の講座で取り上げます。

Slide 6

今回は、正教会の共同の「祈り」の代表、「連祷」に注目します。輔祭（または司祭）の「主に祈らん」という呼びかけに対して、信徒あるいは聖歌隊が「主憐れめよ」と「答え」ます。まさにコール&レスポンスです。聖体礼儀だけでも、大連祷、小連祷、重連祷、増連祷、合わせると10個以上の連祷があります。

では、「連祷」ギリシア語でリタニア、嘆願の意味ですが、この形は、いつごろどのように始まったのかご存じですか。4世紀の終わりごろと言われています。4世紀はキリスト教にとって重要な時期です。

Slide 7

4世紀はキリスト教を困む状況が大きく変わった時代です。初めの頃キリスト教は迫害されていたから、信徒たちはだれかの家に集まって、ひっそりお祈りしていました。死をも覚悟した信徒たちの熱い集まりでした。それぞれ祈りを唱え、司祭がまとめ、最後にみな「アミン」（そのとおりです）と言って合意を表明しました。

Slide 8

ところが313年、ミラノ勅令が出てキリスト教は容認され、380年にはローマの国教になると状況はガラッと変わります。キリスト教徒の立場も一転、名誉なこととなり、出世の得になるから洗礼を受けるなんて人まで現れます。祈りの場所も、誰かの家の小さな一室から、バシリカと呼ばれる大きな建物が使われるようになりました。バシリカとは「王の謁見の間」です。ローマの公共施設です。

Slide 9

**連 祷 4世紀末～**  
 Attavia (Roman) Litany  
 Αστρ = 嘆願

大連祷(小連祷) 「…主に祈らん」 「主、憐れめよ」  
 増連祷 「…主に求む」 「主賜えよ」  
 重連祷 「…聞き入れて我等を憐れめよ」  
 「主、憐れめよ(3回)」

**小さな熱い集団の祈り**



- 各人が祈りを唱える。
- まとめる。
- 「アミン」と合意する。

**ローマの国教 国民総キリスト教徒**  
 ①聖堂の巨大化 ②祈りの専門職化




このあたりのことは昨年、私と水野神父さまで行った講演『堂の美なるを愛する者』で詳しくお話ししました。図版たっぷりの講演録があるのでご覧ください。300円と送料でお送りします。

#### Slide10

みんなでひとつのテーブルを囲んで祈っていた信徒の小さな集まりは、何千人という人が集まる大規模イベントになりました。群衆が押し寄せて大切な捧げものがもみくちゃになっては困るので、祭壇の周りを柵で囲むことも始まりました。結果、聖職者と信徒の距離が遠くなり、また聖体礼儀を司る主教さんはお年寄りであることが多かったので、声が小さくてよく聞こえない、そのうち聞こえないのが当たり前になり、祈りのことばは黙唱（silent prayer）になり、何もないとザワザワするので、聖所では別の歌が歌われるようになりました。



#### Slide11

帝国の国教となれば皇帝も参列します。ローマの宮廷儀式に則った大がかりな行列が行われ、高位聖職者、主教の衣装もローマの高官のものになっていきます。（これは皇帝ユスティニアヌスの行列の絵、ラヴェンナにあります）。聖職者と信徒の距離が、心理的にも大きくなってゆきました。



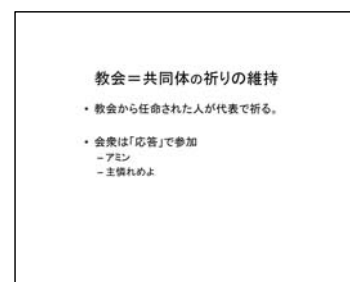
#### Slide12

祈りの形の変化をもたらしたもうひとつの原因が「異端」の問題です。初期の教会では信徒が自由に、即興で祈りを唱えていましたが、間違った教えが入り込むようになり、悪影響を防ぐために、主教たちは集まって会議を開き、ガイドラインを決めました。中でも全地のすべての主教が集まって教義を決めたのが全地公会です。4世紀から8世紀に開かれ、ちょうどこの時期が正教会で盛んに聖歌が作られた時期と一致します。正教の聖歌は「正しい教え」を伝えるための歌で、ただのBGMではありません。

364年のラオディキアの地方公会議の条項の中に「アンボの上で祈りを唱える（歌う）人は教会が任命した人だけに限る」という項目があります。

#### Slide13

祈りのことば（祝文）もだんだんと「定型」、きまったことばになり、決まった人が決まったことばで祈りを唱え、一般の会衆はそれに対して「アミン」（そうです）と合意のことばを言う形ができてきました。



Slide14

もうひとつ連禱の元になったと言われるのが「リティヤ」の祈りです。今でも祭日の晩課あるいは晩堂課の最後に祈られます。連禱はギリシア語でリタニアと言います。リティヤも連禱も語源は同じリティ、意味は「嘆願」です。日本語では熱衷公禱と訳されています。みんなで熱心に、何度も「主憐れめよ」を唱えて、主に頼み込む祈りです。

昔のコンスタンティノーブルは街全体が祈りの場と考えられていました。行列を組んで歌いながら街を練り歩き、広場でリティヤを祈りました。特に地震や水害、干ばつなどの自然災害の時、敵に包囲されたとき、コロナのような疫病に苦しめられたとき、皇帝も主教も国民も街の広場に集まって、神の憐れみを求めて「主、憐れめよ」を何度も唱えて祈りました。だから今でもリティヤの4番目の祈願には「この都邑、凡の都邑と地方が、飢饉・疫病・地震・水難・火難・剣難・外攻・内乱より護られ」とあります。「主、憐れめよ」は「主よ、憐れんでください」と控えめに、お情けを待つ祈りではなくて、神に向かって「嘆願」「要求」する祈りです。皇帝や総主教を先頭に、住民全体で団体交渉します。「主、憐れめよ」をたくさん言います。日本では12回で済ませています、祈禱書では40回、30回、50回です。



Slide15

リティヤは外の祈りですから聖堂の外に出て行くとその感じがわかります。名古屋にいたころ、降誕祭の晩禱でスティヒラを歌いながら外に出てリティヤを祈りました。正教の祈りが教会の信徒のためだけの内向きの祈りではなく、「世界のために祈るのだ」と感じられました。外で、と言われているものはちゃんと外で行うと、なんか違います。何でもやってみるのはいいと思いますよ。



Slide16

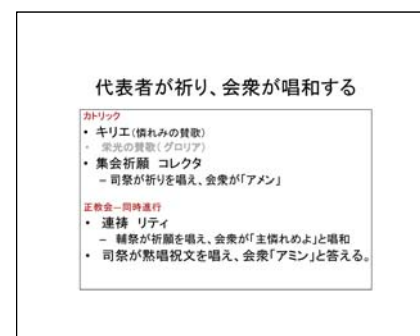
連禱のもっとも古い形は五旬祭の晩課に残っています。大齋から復活祭、五旬祭の期間には古い形がたくさん残っています。

長いひざまずきのお祈りです。まず輔祭が「我等、膝を屈めて主に祈らん〜」(祈りましょう)と信徒を祈りに招き、信徒は「主憐れめ、主憐れめ、主憐れめよ」と主の憐れみを乞い、司祭が長い祝文を唱え、最後に、みんなで「アミン」と合意します。これが古い形です。



Slide17

小さな部屋から大きな聖堂への移行、異端の問題への対処、街全体の神への嘆願、これらがまとまって連禱の形になりました。





カトリックではミサの始まりに「主よ、憐れみたまえ」と歌う「憐れみの賛歌」キリエを歌って、栄光の賛歌グロリアをはさんで、司祭が「集会祈願」「集祷」(ラテン語でコレクタ)の祈りを唱え、会衆が「アメン」と唱和します。

正教会は同時進行です。イコノスタスの王門の外、輔祭が色々な祈願を唱え、信徒は「主憐れめよ」と嘆願します。同時進行で至聖所の中では司祭が祈りのことば祝文を唱えます。最後に「蓋・・・」を大きな声(高声)で言って、信徒は「アミン」「はいそうです。そうします」と合意します。輔祭が居ない場合は、神父さんは連祷を唱えながら、黙唱するそうです。忙しいですね。

Slide18

「大連祷」を詳しく見てみましょう。さきほどの五旬祭の古い形にあてはめるとこうなります。輔祭が「祈りましょう」と誘い、輔祭が世界や地域全体のための祈りを唱え、私たちも一緒に「主、憐れめよ」と主に願い求めます。教会全体で祈ります。

**大連祷**

輔祭 我等安和にして主に捧らん。 (讃)主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が罪の爲に主に捧らん。

輔祭 全世界の安和神の聖なる御教會の聖立、及び衆人の合一の爲に主に捧らん。

輔祭 此の聖堂、及び僕と僕人と神を畏る心とを以て此に集る者の爲に主に捧らん

輔祭 教會を司る我等の主教(基)、司祭の尊品、ハリストスに認る輔祭職、ことごとくの牧長、及び衆人の爲に主に捧らん。

輔祭 汝が國の天恩及び國を司る者の爲に主に捧らん。

輔祭 このまちと凡のまちと地方、及び僕を以てこの中に集る者の爲に主に捧らん。

輔祭 氣候順和、玉粒豊稔、天下豊平の爲に主に捧らん。

輔祭 統膺する者、旅行する者、病を患ふる者、難難に遭ふ者、歳となりし者、及び我等の爲いの爲に主に捧らん

輔祭 我等神の美徳と慈愍とを畏るが爲に主に捧らん。

司祭 祝文(祈りのことば) 黙唱

Slide 20

輔祭を見てください。信徒と同じ側で、信徒と同じ向きで立っています。輔祭は信徒代表です。輔祭の後ろには信徒の団体がついていきます。団体交渉です。信徒が本気で「主、憐れめよ」と頼むかどうかで、祈りの力が違って来るはずですよ。頼めばいいんです。イエスは「頼みなさい」と言っています。「求めよ、そうすれば与えられる。探せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすればあけてもらえる(マタイ7:7)」

**輔祭の祈願=人々の祈願**



聖歌隊が歌う場合、信徒で歌う場合と教会によって状況は違うと思いますが、信徒全員の祈りの力が結集できるか、そこが鍵です。

Slide19

輔祭と聖歌隊が大連祷を行っている間に、司祭は祝文を黙唱しています。黙唱祝文は大切な祈りが入っています。連祷に続いて祈る方法をとっている教会もありました。ただ、長くなります。

**大連祷 第1アンティフォン 祝文**

主我が神や、爾の權柄は繁り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限り無く、仁愛は言い難し、求む主宰や、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩沢と爾の愛憐とを施し給え、

輔祭 神や、爾の慈憐を以て、我等を助け給へ憐れみたまえ。

輔祭 我等が罪にして害りて難難なる我等の世の光榮-全神聖なる聖堂アワサシ、聖堂よを聖樂して、我等が心を以て聖に集る者の爲を以て、ハリストス神に捧げ奉らん。

(司) 主 聖に

(讃) 主 聖、凡そ光榮聖堂は神は聖父と聖神に認る、今も統膺も聖堂に、

(司) 「アメン」

主我が神や、爾の權柄は繁り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限り無く、仁愛は言い難し、求む主宰や、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩沢と爾の愛憐とを施し給え、

(高声) 蓋凡そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、

司祭の祝文は、「主我が神や」と、まず、「私たちが祈る、頼む相手は、あなたです」と呼びかけ、「あなたの力は比べるものなく、あなたの栄光は理解を超え、あなたの憐れみは限りない。あなたの愛は筆舌に尽くしがたい。」と称え、「ご主人様、あなたの憐れみによって、私たちとこの聖なる家と、私たちと一緒に祈る者たちにあなたの憐れみの豊かさをください。」と願い求め、最後に、「蓋・・・」「なぜならば、すべての光榮、栄誉、礼拝はあなた、父と子と聖神によるからです。今も、いつも、永遠に」と確認して結び、その司祭の祈りに対し、聖歌隊だけが歌ったとしても、信徒全員が「アミン」(そうです。そう信じます。)と合意します。

余談ですが聖体礼儀の大連祷は、もともとはヘルビム歌の前、今の信者の連祷がもともとの位置で、11世紀ごろ聖体礼儀のはじまりに冒頭に移されました。

Slide 21

これからいくつか、サンプルを聞いていただきます。どんな歌い方がいいか、悪いか、考えてみてください。

最初の2つは大阪の松田長輔祭さんをお願いして、大連祷の初めの部分を歌い方を変えてみました。違いを聞いてください。注目点はテンポと掛け合いのタイミングです。

[Wav 1] 連祷遅れめ [Wav 2] 連祷かぶせめ

最初のは、普通に歌ってみました。輔祭さんが「主に祈ら～～ん」と言ってから、「主、憐れめよ～」と歌いました。

二番目は意識して、「主に祈ら～～ん」が終わるか終わらないうちに「主、憐れめよ」を歌いました。どうですか？気ぜわしい？

かぶせめに歌おうとすると、輔祭さんのことばを聞いて、待ち構えていないと、出られないので、祈りのことばが「自分の祈り」になるというメリットがあります。

[Wav 3]

三つ目は、ある方から、「初めて教会に来たとき、何を言っているのかわからなかった」「主、憐れめよ」とは聞こえなかったと言われました。「主、憐れめよ」が「主憐れめよ」と続いてしまうので、あえて「主」の間に「点」を置いて、「憐れめよ」をはっきりしてみました。

Slide22

Wav ⑤

こういうの、経験ありませんか。単音の場合はあまりないと思いますが、四声の場合は時々あります。「主に祈らん～」と言われてから「ドソミド」と音を取っておもむろに歌い始める。これでは輔祭の祈願と「主憐れめよ」がバラバラです。

また単音でみんなで歌う場合は逆に、みなさん遠慮して、誰かが出てから歌おうとして、どんどん、遅れてしまうというのがあります。だから指揮者とまでいかななくても、率先して歌う人、「出」の合図をするリーダーは必要です。東京大主教区では「聖歌リーダー」の養成講座をずっとやっていましたが、



流れのいいお祈りを作るためには各教会にリーダーが必要です。

次はモスクワ神学校、至聖三者修道院の側にある神学校の土曜日の晩禱を聞いていただきます。ここにはレーゲントコース（指揮者コース）も併設されていて、女子学生もたくさんいました。ロシアでも一二をあらそう優秀な学生が集まっていますし、歌も上手です。でも、この連禱、ちょっと気になりました。

[Wav 6]

指揮者、最初に出遅れましたね。そのあとも毎回毎回音を取っています。変化のある難しい和音だから、心配になって音を取るのだけれども、耳障りでした。お祈りも授業の一環で、当番の学生の後ろで、怖い顔したおばちゃん先生がにらんでいるので、緊張しているのだろうなあと気の毒ではありましたが。

昔、先生から言われたことですが、聖歌指揮者は「黒子」のようなもの、目立っちゃいけない、音取りも、祈りの音楽としてはなくていい音だから、できるだけ少なく、邪魔にならないようにすばやく取るようにと教えられました。また「祈りの音楽」としての観点から見れば、毎回音を取らなくてはならないほど難しい歌は祈りの流れの邪魔になる、だったら祈りに集中できる無理のない歌を選びなさいということになります。

実際、神父さんや輔祭さんに意見を聞くと、「主に祈ら〜ん」と「主憐れめよ」のやりとりが、ころころ、ころころスムーズに進むと祈っていて気持ちがいいと言われます。神父さんや輔祭さんだけでなく、聞いている信者さんも同じではないでしょうか。

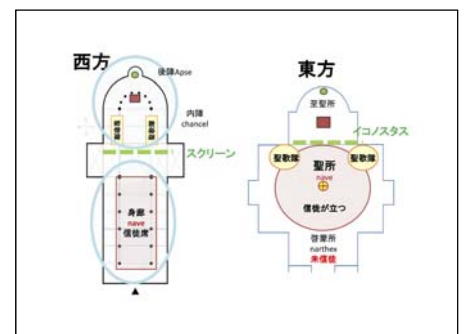
次にお聞きいただくのはサンフランシスコ郊外のサンアンセルモという小さな街の奇蹟者聖ニコライ教会の早朝の聖体礼儀です。作曲家でもある音楽大好きな神父さまの教会で、平日の朝7時からだというのに、出勤前の若い人たちが聖体礼儀に集まっていました。

[Wav 7] 最初の司祭の高声の響きが終わらないうちに音を取っています。歌っていたのは7、8人だったと思います。気持ちのいいお祈りでした。[wav] 輔祭の調整

Slide23

最後にもう一度、正教会と西方教会の聖歌隊の役割の違いを確認します。『堂の美なるを愛する者』の講演でお話しした内容です。最近のカトリック教会は会衆参加を重視した聖堂が多いですが、かつては縦長の聖堂の奥の方で、聖職者と専門職の聖歌隊だけが祈りを進め、信者は手前の信徒席から見るだけでした。

正教会では聖職者はイコノスタスを通して、至聖所から聖所へと頻繁に出入りし、聖歌隊は聖所の前方に立ち、至聖所と信徒の祈りをつなぎ、祈りは聖堂全体で進められます。



祈りの流れという点でも異なります。カトリック教会のミサを見学したことがあります、次はこれ、次はこれ、次はこれというようにアナウンスがあり、プログラムがひとつ終わり、また一つ終わりという感じでした。それに対して、正教会では祈りの流れの全体性、奉神礼が一続きに続いていくことが大切に

されます。大連禱、第一アンティフォン、小連禱、第2アンティフォンという流れは、個々のプログラムの演目ではなく、次から次へと切れ目なく、一つの流れ、一つの息として進むことが求められます。

聖歌隊は祈りを進める動力であり、信徒とともに祈ります。だから聖歌隊の定位置はイコノスタスの前です。ロシアでは18世紀以後、西方の影響を受けて、バルコニーからプロの聖歌を聞かせることが多くなりましたが、これは正教本来の姿ではありません。

信徒とともに祈る工夫はいろいろ行われています。男声合唱で有名なモスクワのスレチェンスキー修道院では皆が歌える部分は聖歌隊が下に降りてきて、信徒と一緒に歌っていました。アメリカのウラディミル神学校では連禱の部分は指揮者が信徒の方を向いて、みんな一緒に歌っていました。ロシアでは信徒が歌うことは稀ですが、連禱が祈られるたびに、大きく十字を描いてお辞儀して、「祈り」に参加していました。色々な工夫ができます。

日本の地方の教会では信徒全員で歌う教会が多いのですが、中には歌うことが負担に感じられる方もおられるので、一部分だけ、連禱だけ、信経だけ、天にいますだけ参加するという方法もあると思います。信徒も連禱の時十字を描くように勧めるのもいいかもしれません。

聖歌隊が代表して歌う場合も、まず信者と「ともに歌っている」、祈り全体を支えているという意識が大切でしょう。

以前、ある修道院長さん、とても音楽に造詣の深い修道院長さんに言われたことです。聖歌隊は「下手なものもいけないけれど、上手すぎるのもよくない。下手なのは耳障りで祈りの邪魔になるし、上手すぎて、聖歌隊に注目が集まってしまうのもよくない。神への視線を遮ってしまうから。」と言われました。まあ、上手すぎるってのはあまりないですが。

教会の音楽は神に仕えるものです。神の僕です。音楽は主役ではありません。音楽や芸術を切り離して主役にすることをよしとしたのが、西洋の、というより近代現代の芸術観です。私たちもその中で暮らしているので注意が必要です。教会の教えでは「主は神」です。



Slide25

全員で歌おうが聖歌隊が歌おうが、いずれの場合でも、皆で祈ります。輔祭さん、神父さん任せにしちゃダメです。連祷は慣れているから、何も考えなくても、口だけ動かして「主、あわれめーよ」と歌えます。私もそういうことがあります。あるいはきれいなハーモニーを作ることに気を取られて、祈りのことばはそっちのけ、「主、賜えよ」に変わったことも気づかず、慌てて「主、あたまえよ」なんてこともあります。



正教会ではよく、「あなたの小さな不機嫌が波紋を広げ、世界の向こう側で戦争が起こり、誰かが殺されるかもしれない」と言いますよね。同じことが言えると思います。私の気の抜けた「主憐れめよ」によって、神の救いを逃したかもしれない、でも私たちの熱心な「主憐れめよ」は神に通じ、誰かを救うかもしれません。

大連祷のことば、何でも入っています。世界の平和、教会の堅立、人々の一致、教会の聖職者、奉仕者、信徒のため、また国を統治する者のために祈ります。地球温暖化、コロナなど、科学的な対処も必要だけれど、私たちはまず神に祈りましょう。作物の実り、平和のため、病気や苦難にある人々のために、また私たち自信が落ちこんで、怒り狂って、ひどい困難にならないように・・・この一つ一つを輔祭（司祭）に率いられて、教会一丸となって、神さまに頼み込む、本気で懇願する気持ちがあるか、抜けているか。随分違うと思います。

Slide 26

今回は11月20日。引き続き実技編、緑のシリーズで、掛け合いの続き、「アンティフォン」を取り上げます。日本ではアンティフォンと呼ばれていてもアンティフォンで歌っていないことが多いのですが、工夫してみる価値があります。

12月は青のシリーズ「正教聖歌の伝統」で、聖歌のお名前シリーズの続きで「コンダク」をとりあげ、コンダクの名手、聖歌者ロマンとその代表作品「降誕祭のコンダク」についてお話しします。

